‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

34号 1991.6.30
文・編集・発行
恋怪子

BAND: ティラノザウルス

エドガア・アラン・ポーの短篇集(「バベルの図書館」シリーズ 国書刊行会)にこの短篇集の訳者 富士川義之氏の書いた「ポーの魅力」と題する文の載っている国書刊行会の月報が入っていた。それを読んでいて「今度久しぶりにポーを翻訳する機会を与えられて今更ながら感じたのは、ポーの短篇が徹底した作為性に貫かれているということである」ところに来たとき、その「作為性」ということばにビクッと反応した。31号(1991.5.27発行)で5月15日のラ・ママのティラノザウルスのライブ感想を「作為」ということばで始めたから。あのときのライブでうかんできた「作為」ということばを追いかけて感想を書きはじめたら「作為をいくら積み重ねたってミステリアスなものは生まれない」という文になった。「作為性」ということばにビクッと反応したのはそのせい。そして「ポーの魅力」を何回も何回も読み返し、ティラノザウルスのライブのことをずっと考えているうちに、自分の書いた「作為をいくら積み重ねたってミステリアスなものは生まれない。作為の核に不思議がなければ」というの、ちがっているっていうことがわかってきた。ライブで「作為」ということばがうかんできたのはたしかなのだが、それを追いかけていくいき方が甘かった。心の表面をさっとひとなでしただけだった。

ティラノザウルスの場合、核に不思議があるのは確かなのだから。それがなくなることなどあり得ないのだから。だからライブが心にとどいてこないとしたら、それは不思議がないからではなくて、作為がじゅうぶんでないからなのだ。それがわかった。

「とにかくポーの短篇を読むと、時には息苦しくさえ感じられるほどの技巧の冴え、鮮かな作為性を認めないではいられない。そういう特性が個々の短篇の細部に奇妙な、しかも時には驚嘆すべきリアリティーを与えているのである。」(「ポーの魅力」より)

これ、まるごとティラノザウルスにあてはまる。鮮かな作為性が奇妙な、そして驚嘆すべきリアリティーを感じさせる。小説や詩なら徹底した作為性をその作品に固定させることができるけれど、ライブはそこで生きているのだから固定させることができない。だからこそだろう、鮮かな作為性の奇妙な、そして驚嘆すべきリアリティーがライブで感じられたときのその驚嘆は、現実生活を完全に消し去り、その作為性のリアリティーの中にしか自分が存在しなくなるほどの驚嘆である。こういう作為性のリアリティーを感じさせるのはティラノザウルスだけ。

富士川義之氏の「ポーの魅力」を読んだのが6月7日で、それからずっと考えていて、31号に書いたことがちがっていることに気がついたのが6月17日。
そして6月18日にティラノザウルスのファンの真由美さんから、6月20日にやはりファンの和子さんから、それぞれ手紙が来た。私が行かなかった6月15日のライブを最後にベースの人とドラムの人がティラノザウルスを辞めたこと。その時のライブの様子を書いてくれていた。2人とも悲しんでいるけれども、私は悲しむよりもこれからのティラノザウルスを楽しみにすることに時間を費いたい。
ティラノザウルスにかわり得るバンドがあるとすれば、それはこれからのティラノザウルスだけだから。

次のライブ 7/15 ラ・ママ(ワンマン)

LIVE: 毒入りマヨネーズ 1991.6.25 新宿SOUND HOUSE

毒入りマヨネーズの前にやったバンドがひどくて早くおわればいいと思っていたら、アンコールまであってヤレヤレ。一刻も早く毒入りマヨネーズがききたくてたまらなくなった。ステージと客席のあいだのスクリーンが上がった。ステージにいるのはヴォーカルとギターの2人だけ。この日まで毒入りマヨネーズのライブを3回見ていて、最初の2回はヴォーカル、ギター、キーボード、ドラム。3回目はヴォーカル、ギター、ベース、キーボード、ドラム。この日はヴォーカル、ギター、機械(なんていうのかわからないけどキーボードやドラムの音が入っているもの)。というように毎回のように編成がちがうのに全部毒入りマヨネーズのライブになっている。そしてこの日でヴォーカルとギターが毒入りマヨネーズの本体なんだということがよくわかった。キーボードもドラムもベースもサポートだといっていたけどそれがよくわかった。サポートがなかったから本体がくっきりとあらわれたというわけ。
この日のライブは「ステキ!」がいっぱい。2人が椅子にすわってやった何曲かの中で「バレット」という曲、あんまりステキで涙がこぼれそうだった。
曲と曲のあいだのおしゃべりは、機械のボタンを押したり、ギターの人との打ち合わせみたいなのがあったりで、いつもの話術っていう感じじゃなかったけど、演奏がステキだから曲になったとたんに、おしゃべりをきいて笑っていた軽い気分がふきとんで、曲にグーッとひきこまれて、ステキな2人に見とれてしまうのでした。

次のライブ 7/11 TAKE OFF 7

LIVE: THE STREET BEATS 1991.6.21, パワーステーション

ステージの上のØK1からØK1が視えてこない。歌っているØK1を見ているだけでなにも体験できない。はじめの方にやったSEIZIの「SHOULD I STAY OR SHOULD I GO」今まではいつもライブの息ぬきみたいに感じられたのに、この日はパワフルでカッコよくて、しっかりきいた。前半でよかったのはこのSEIZIの歌と「サンクチュアリー」だけ。後半ØK1をあきらめてSEIZIに目をやったとたん、えっSEIZIってこんなにカッコよかったっけ? ØK1の歌からだとTHE STREET BEATSの世界が体験できず、歌が前にあるだけで体のうしろにまわってこないのに、SEIZIのギターからだと自分がTHE STREET BEATSの音につつまれる。
それからおわりまでずっとSEIZIだけを見ていた。ギターの音を追いかけていた。ØK1の歌はとおくにきこえているようだった。

☆ 10/10, 10/11 パワーステーションでライブ決定。

1991.6.22 パワーステーション

目が一組しかないことが、心が一つしかないことが残念に思えた。それほどØK1とSEIZIが眼前に大きく存在し、どちらに目を向けたらいいのか、どちらに心を向けたらいいか、一瞬一瞬選択をしなければならなかった。
心に強くひびくライブって、ステージ全体を一度に見ることができない。誰か一人に目の焦点も心の焦点もしぼられてしまうから。焦点をしぼって見ているとØK1の体を通過してなにかが視えてくるし、私の心がØK1の心に触れる感じがする。そうすると目は瞬きを止めるし、心臓も鼓動を止めるし、肺も呼吸を止める。その一瞬が「永遠」である。この日の「世界一悲しい街」はそれだった。それと久しぶりにきく「星降る夜に」! ØK1が「ライブってこんなに楽しいもんだったんだ」って笑顔でいった。ほんとうに私もそう思った。

LIVE: THE WAIATS 1991.6.15 新宿アンティック

THE WAIATS 次のライブ 7/13, 7/26, 7/31 新宿アンティック

11月にCDがでるそうです。

PHOTO: アンティック発行「SOS」からいただき。

はじめてきく曲でライブがはじまり、すぐにひきつけられた。ヴォーカルの人って見るたびに別人のように感じる。それはきっと、THE WAIATSのライブそのものがそのたびにちがう表情を出しているということなのだろう。この日のTHE WAIATSは疾走感じゃなくて重量感。昔は射すようにとどいてくるんだけどそれがズーンという感じなのだ。3曲目の「ダイヤモンド・アレー」のはじめのところで、このズーンがものすごくて、全身の、とくに頭のうしろの方の、THE WAIATSの音楽を受けるのに要るもの以外の余分なもの、余計なものが撃ちとばされた。5曲目の「SHOTGUN BOY」で、このズーンという感じが強いのは、どうもベースのせいらしいと気がついた。もちろんベースだけがヘヴィというんじゃなくて、4人のつくり出すものがヘヴィなんだけど…。体から余分なもの、余計なものが撃ちとばされた状態できく「I WANNA TELL YOU」は…!! 息をのんだまま。目に涙がにじんだ。THE WAIATSの4人がステージでやっていることが、涙になって私の目ににじんでくるまでに、どれだけのことがおこっているのだろう? ボードレールが幽霊で「千年も生き来しほどの思い出のわれにありけり」と詠んでいるような、千年もの時間がそのあいだにあった。

記事以外でよかったLIVE: 毒入りマヨネーズ 6/15 エッグマン

RIPVAN WINK 6/18 ラ・ママ 8/17 ラ・ママでワンマン

EIZI 6/24 RUIDO 7/30 RUIDO なんとミラクル・クッキーズといっしょ!